

英語の文法的比喩とその英語教育への 応用について

佐々木 真

英語の文法的比喩とその英語教育への 応用について

佐々木 真

梗 概

本小論では英語における文法的比喩 (grammatical metaphor) とその機能について概観し、実際の英語教育にどのように応用ができるかを考察する。文法的比喩はある命題をどのように意味化して伝えるかということであり、この比喩の使用により様々な目的に応じて適切なテキストを構築することができる。しかし外国語においてはその理解が難しく、学習者にとっては障壁の一つにもなっている。本論では文法的比喩について特に名詞化と過程構成について焦点をあて、実際の英語教育ではその使用される環境とパターンについて学習者に提示すべきではないかと提案する。

キーワード：選択体系機能言語学、文法的比喩、名詞化、過程構成、英語教育

1. はじめに

愛知学院大学短期大学部英語コミュニケーション学科では学生の英語能力の一層の向上を図るために英語検定や TOEIC, TOEFL などの対策を念頭に置いた個別指導を行っている。これらの対策では授業で網羅できない項目をきめ細く指導できるため、受講生の英検合格率、あるいは4年制大学への編入学試験の合格率に結びついている¹⁾。

このような個別指導では英文の構成、ならびに文章の内容把握をさせるために英文和訳を課することが多く、これは語彙力の強化にも結びつく。しかしながら、その指導で直面するのが様々な英語表現の理解力不足である。これは単に英文構成の知識がない、語彙力がないという語彙・統語レベルでの理解力不足と、代名詞や同意語が何を言及するのかという談話レベルの理解力不足に分けられる。前者はどの教員でも説明するまでもなく平素直面する問題であり、前置詞句や接続詞の係り方、分詞構文、時制など枚挙にいとまがない反面、理解できていない箇所が簡単に同定できるためにその指導を比較的明瞭に行うことができる。

談話レベルでの理解力不足ということにおいてはテキスト内で多用される指示代名詞が具体的に何を指し示すのかを理解できない。すなわち代名詞の指示による命題の意味的連結が理解できないのである。例えば、*It looks fine to me.* を「それは私にはいいようだ」と日本語にはできるが、*It* の示す「それ」とはその文が使用されているテキスト内の何を示しているか見抜けず、前後の意味を接続できない。さらに難易度が高いのは定冠詞と名詞を使って前出の項目を言及する場合である。たとえば、*John has been playing tennis for more than ten years. He wants to be an instructor of the sport in future.* という文章を和訳させると多くは「ジョンは10年以上テニスをしている。彼は将来スポーツの指導者になりたいと思っている。」のようなものになり、*the sport* が *tennis* を言及して、「彼は将来テニスの指導者になりたいと思っている。」という意味を捉えることができる学生が少ない。これは談話レベルの結束性の概念が不足するために陥る理解力不足であり、代名詞や *the* と上位語を使って繰り返しを避けるという

法則性や、前方照応 (anaphora)、後方照応 (cataphora)、外部照応 (exophora) の概念 Halliday and Hasan (1976) を解説することで理解力を促進できるようである。またこの他にも社会言語学的側面あるいは語用論的側面に帰因する理解不足などもあるが²⁾、これらの運用上の問題は本学でのコミュニケーション指向のカリキュラムの運用によって学生への教示する機会も多い。

しかし上記の他にも学生達の英文理解を妨げるものがある。それが本論で取り上げる文法的比喩 (grammatical metaphor) である。これは語彙・統語レベルと談話レベルの融合した表現形式の変種であり、洗練された知識と言語の運用能力が求められる。例えば、*In fact, the number of hours Americans put in is the highest in the world, and with U. S. firms offering the lowest number of paid vacation days in the Western World.*³⁾ という文の *with* とそれに後続する名詞と分詞による記述の連結が理解できない。これは単に *with* という前置詞の問題に限らず、前置詞句によってもたらされる名詞句全体の意味ということが問題になる。

本論ではこのような複雑な名詞句の問題などを個々の事例に関わる事項とするのではなく、体系的なシステムの中で作用する文法的比喩として扱い、その理解と表出をどのように指導するのかということを論じていく。

2. 文法的比喩

文法的比喩とは選択体系機能言語学の中で提言されている概念である。比喩とは本来「～のように」と例える直喩と「AはBである」のように全く異なったものをつなげる隠喩があるが、文法的比喩は *grammatical metaphor* という英語表記が示すように、隠喩のような使用を前提とする。すなわち A という範疇のものを B という異なる範疇のもので例える。ただし「文法的」という語が示すように、この範疇とは文法的な形式を指し、ある表現を異なる文法形式によって表現することが文法的比喩と捉えることができる。Halliday (1994) は次のように述べている。

There is a strong grammatical element in rhetorical transference; and once we have recognized this we find that there is also such a thing as grammatical metaphor, where we have recognized this we find that there is also such a thing as grammatical metaphor, where the variation is essentially in the grammatical forms although often entailing some lexical variation as well. (Halliday 1994: 342)

文法的比喩とは直接的な表現を別の間接的表現に変えて表現することである。その直接・間接性を論じる概念として congruency (一致性) という語が用いられる。Egins (2004) の説明はそれを端的に表現している。

Nominalization is on type of what Halliday identifies as **grammatical metaphor**, situations where meanings typically (**congruently**) realized by one type of language pattern get realized by other less typical (**incongruent**) linguistic choices. (Egins 2004: 99)

すなわち、比喩性が低く言語形式と意味を結びつける線が直接的であるものが congruent (一致している) であり、その線が間接的なものが incongruent (一致していない) ということである。たとえば、*they arrived at the summit on the fifty day*⁴⁾ という節では行為者[^]動詞[^]場所⁵⁾の順で表示され、直接的表示になるから比喩の度合いが低く congruent なものになる。しかし同じ内容を *the fifth day saw them at the summit*⁶⁾ と表現すると時間[^]動詞[^]人間という順の構成となり、直接的なものとは言いがたい。しかも動詞が「見る」という視覚を表示する一方で主語が非生物の *the fifty day* となっているために、比喩性が高く incongruent な表現になっていて、文法的比喩が用いられると言えるのである。なお、これらの詳細については後述する。

文法的比喩は congruent なものが良く、incongruent なものが悪いという性質のものではない。以下の記述が示すように、むしろ言語体系が洗練され、様々な意味を理解・生成できることを示している。

This is not to say that the congruent realization is better, or that it is more frequent, or even that it functions as a norm; there are many instances where a metaphorical representation has become the norm, and this is in fact a natural process of linguistic change. Nor is it to suggest that a set of variants of this kind will be totally synonymous; the selection of metaphor is itself a meaningful choice, and the particular metaphor selected adds further semantic features. But they will be systematically related in meaning, and therefore synonymous in certain respects. (Halliday 1994: 342)

文法的比喩はその比喩性が増すにつれて、同じ命題を直接的に表現するもの (congruent) とには距離が生まれる。したがって congruent な表現との関連性をうまく理解する必要があり、その習得と運用には時間がかかる。それ故、文法的比喩は大人の談話の特徴づけるものとなる。また後述する文法的比喩の一例である名詞化は文語で多用され、テキストの意味形成においての名詞句の比重を増すこととなる。内容語が語彙全体に占める比重は語彙密度 (lexical density) と指数で表示されるが、以下の引用が示す通り文語はその指数が口語よりも高い。したがって、文法的比喩は文語の特徴づける一因とも考えられるのである。

...the point is that the less metaphorical variants tend to occur in speech and the more metaphorical ones tend to occur in writing. Hence we can say that written language is associated with the use of grammatical metaphor. (Halliday 1989: 95)

文法的比喩が様々な表現形式の変種を生み出すものであり、それが一定の成長と教育をふまえた大人の談話の特徴 (a dominant feature of adult language)⁷⁾であり、また文語の特徴であるということは外国語の学習者と言う観点から見れば、かなりの熟達を要するともいえ、その学習段階としては様々な文献に接することが多くなる大学教育がもっともふさわしく、また同時に求められる現場であろうことは察するに難くないであ

ろう。

3. 文法的比喩の種類と指導の実践

それでは実際に文法的比喩にはどのようなものがあるのでしょうか。文法的比喩は選択体系機能言語学の3つのメタ機能、すなわち観念構成的メタ機能、対人的メタ機能⁸⁾、テキスト形成的メタ機能のそれぞれに関わるが、本論ではその中で観念構成的メタ機能に関しての名詞化(nominalization)と過程構成に関わる比喩に焦点をあてることとする。

3.1. 名詞化

観念構成的メタ機能に関わり、なおかつ文法的比喩の典型例として取り上げられるのは名詞化(nominalization)であり、文法的比喩の中でも最も強力なツールとなっている。

Nominalizing is the single most powerful resource for creating grammatical metaphor. By this device, processes (congruently worded as verbs) and properties (congruently worded as adjectives) are reworded metaphorically as nouns; instead of functioning in the clause, as Process or Attribute, they function as Thing in the nominal group. (Halliday 1994: 352)

名詞化とはある出来事を名詞表現にするものである。たとえば *Excessive consumption of alcohol is a major cause of motor vehicle accidents*⁹⁾ という例を考えてみる。この節では *consumption* という語と *cause* という名詞がそれぞれ「消費する」という事柄と「引き起こす」という出来事が名詞化され、それが連辞で結びつけられている。このような名詞化においては名詞句の中に動きや出来事が埋め込まれ、それが *be* 動詞で接続される構造を持ち、記述や定義という目的に用いられることが多い。この例のように「消費」が「原因」という内容であれば大学生でも理解にさほど難しくはないと思われるが、「過度のアルコール消費が交通事故の大きな原

因である」と言われてもなかなか本当の意味で理解できないものもあるであろう。そこでこれを *People who drink too much alcohol and drive often cause motor vehicle accidents*¹⁰⁾ とか、*If you drink too much alcohol when you drive your car, you are likely to have an accident*¹¹⁾ あるいは *Motor vehicle drivers often have accidents because they have been drinking too much alcohol*¹²⁾ のように変換して実際の動詞表現を用いて動作と、生物主語(行為者)を示すと理解の度合いがあがり、中学生でも理解できるようになる。名詞化された表現は語数も少なく節構造も単純であるが、これを congruent な動詞中心の表現に変換すると接続詞や埋め込み節を伴って複雑化し、それに伴い語数も増える。ここから、名詞化された表現は「圧縮」されたものと呼ばれ、また逆に動詞表現に変換されたものを「解凍」されたものと呼ばれる。

それではこのように出来事を圧縮して名詞化する理由はどこにあるのだろうか。Halliday (1994: 353) では学術的で専門的なテキストにおいての術語の発達に関与し、また同時に、複雑な文章を圧縮し、それを機械転にさらなる議論の展開を可能にしたと述べている。また Hayakawa (2004) は名詞化の用いられる効果として、動きや出来事を *thing* とし、それを *it* などの代名詞によって言及することでさらに補足情報を加えたり、あるいは繰り返し陳述することで情報を蓄積し、読者に情報取得の強化を与えると述べている。実際に名詞化された表現が使われるのは学術図書や大人向けに知識を伝達する新聞や雑誌が多く、記述的な内容に使用される。

英語教育の現場でこの名詞化を導入するには、まずこの名詞化の動機付けを説明することから始めればよいのではないだろうか。筆者が個別指導でこの名詞化表現に接する際、学生には意味を解釈させるものの、先の *Excessive consumption of alcohol is a major cause of motor vehicle accidents* のように表面的な意味を日本語に直すことができても、その解凍した意味を解釈できる学生は大変少ない。その際は当然指導者である筆者が解凍した形を説明するのだが、学生達からは「なぜこのようにわざわざ複雑化した表現をとるのか」という質問が出る。学生達にしてみ

れば同じ事柄を伝えるのに、一方で節を複数使用して接続詞で接合するものがあり、他方で出来事を名詞化して単一節で伝えるものが存在することの意義が理解できなければ習得することができないであろう。

従って、指導者が名詞化表現の使用される言語使用域（レジスター）やジャンルなどを把握し、そこで使用される表現の関係を学習者に理解させることが重要であろう。例えば、筆者の場合は次のように指導している。まず、名詞化表現の特徴として、これらが使用されるテキストは学術的であったり、専門的であったり、あるいはジャーナリスティックであるということを説明する。すなわち学生達が理解しようとしているテキストの性質をまず把握させ、次にこれらには名詞句表現が多用されるのだという認識をさせる¹³⁾。そして、次になぜ名詞化表現が使用されるのかという理由について次のように解説している。第一に、文字数を短縮できるので、限られたスペースにさらに多くの情報を圧縮して詰め込むことができること。第二に、名詞化することで多彩な形容詞を添えたり、前置詞句や関係代名詞による埋め込み節を接続することによってさらに詳細な記述ができるということ。第三に、学術的な書籍の場合には、名詞化表現では名詞句を *be* 動詞で接続するだけの構造になることが多いので、事実や事象の客観的な記述に結びつくことなどである。特に新聞英語などを例として取り上げる時にはこれらの説明が効果的にできるようである。また名詞化そのものは日本語にもみられるものなので、筆者の経験上、例えば、「自衛隊がイラクに派遣される」と「自衛隊のイラク派遣」などを板書して対比させると学生の理解がさらに促進されるようである¹⁴⁾。

次に名詞化のメカニズムを指導する必要があるであろう。すなわち解凍における圧縮された名詞化表現の解凍である。これを説明する場合には、(1)名詞を動詞に直す；(2)形容詞を副詞にする；(3)主語として *you* を当てはめる；(4)前置詞 *of* で表現されるものは目的語として捉える、というような指導をすると比較的学生にも把握しやすいようである。例えば先の例の *Excessive consumption of alcohol is a major cause of motor vehicle accidents* を例とすれば、(1) *consumption* を *consume* として *cause* を動詞の

cause と捉える；(2) *excessive* を *excessively* に変換する；(3) *you* を付加する；(4) *alcohol* と *motor vehicle accidents* をそれぞれの動詞の目的語として捉える。すると機械的**excessively you consume alcohol, you cause motor vehicle accidents*¹⁵⁾ という節が生み出され、それを結びつける接続詞の *if* や *because* を補えば良いのである。これはあくまでも参考例であるが、このように解凍の方法としての方策を上記例のように提示してあげることによって、単に辞書的な意味を並べてつなげるだけの作業ではなく、本来の *congruent* な意味を解釈できることができるようになる。

しかしここで重要なのは平行して派生語の指導をすることである。文法的比喩が難しいのは節構造の難しさではなく、むしろこの語彙の蓄積量と派生語間の関連性の知識が問われるからであろう。すなわち名詞化表現を解凍するには名詞化された語の動詞を知らなくてはならないし、逆に動詞表現を圧縮して名詞化するにもその名詞を知らなくてはならない。従って、筆者の場合、個別指導の際に必ず派生語を質問してその都度学生に辞書を引かせることにしている。学生の中には当初派生語の学習意義や目的がわからずこのような細かい作業に抵抗を示すものもいるが、文法的比喩と名詞化表現の説明をすると得心する学生が多い。また派生語の学習時には語源や語根の解説もできるので、歴史的興味や言語学的好奇心を喚起することができる。

上記の応用例はもっぱら名詞化表現の理解であるが、これを英作文という発信型の教育にも応用することが可能である。例えば、英作文において単に日本語を英文にするというのではなく、ジャンルや言語使用域に適切なテキストを作成させる際において名詞化表現を使用するように促すのである。特に期末レポートや論文指導といった高度な英作文授業に応用可能だと思われる。残念ながら筆者はまだこのレベルで学生指導をする機会がないため、この実践例は他の報告を待つか、今後の課題としたい。

3.2. 過程構成の比喩

次に観念構成的メタ機能に関わる文法的比喩は過程構成に関わるもの

である。過程構成は平易な言葉に換言すれば動詞表現のパターンであり、選択体系機能言語学では動きを表現する物質過程、心理的なことを表現する心理過程、属性や状態を表現する関係過程、言質を表現する発言過程、存在を示す存在過程、生物（主に人間）の行動を表現する行動過程の六つの過程構成を設定している。観念構成に関わる文法的比喩はこの過程構成間の関連によって成立している。

これらの例としては本論の前セクションでも紹介した二つの節、*they arrived at the summit on the fifty day* と *the fifth day saw them at the summit* の関係がある。選択体系機能言語学ではこの動詞句は過程中核部と呼ばれ、過程構成を形成する中心部となっている。前者の例では物理的な動きである *arrived* (到着した) を過程中核部としてとり、過程構成としては物質過程として分類される。何かの出来事を表現する場合の *congruent* な過程構成としては物質過程が用いられる。しかしながら同じような命題¹⁶⁾を具現する文法的比喩として後者では *saw* (見た) が使用され、心理的過程として具現している。

本来何かを「見る」のは生物主語であり、*the fifth day* のような非生物が視覚を認識するわけではないが、*incongruent* な比喩的表現を用いることによって、受け手に対して印象深い表現になる。また逆に心理過程を *congruent* にとる感謝表現でも、*My great appreciation goes to his hard work* ように物質過程を使って表現することもできる。このような *congruent* と *incongruent* が使われる動機は様々であるが、Halliday は次のように我々の日常の言語使用では *congruent* と *incongruent* の狭間を行き来しているという。

It seems that, in most types of discourse, both spoken and written, we tend to operate somewhere in between these two extremes. Something which is totally congruent is likely to sound a bit fat; whereas the totally incongruent often seems artificial and contrived. (Halliday 1994: 344)

ではこの過程構成の比喩を教育現場ではどのように扱うべきなのであ

ろうか。実はこのような過程構成に関する文法的比喩については文学的テキストにおいてその応用性が大きいようである。例に見られるように本来の表現とは異なる過程構成をとるものは不自然であるだけに印象深く、読者にインパクトを与える。これらの作用は文学作品の表現に用いられることによって、一種の美的効果さえ生み出す。実際に Sasaki (1990, 1995) による源氏物語の英語訳分析を見てみると、翻訳者によって過程構成の文法的比喩や名詞化を操作することによって、英語翻訳にオリジナルとはまた異なった独自の価値を生み、それがまた翻訳版の独自性をも醸し出すものとなっている。従って、物語文などの文学作品の読解指導時や、英作文で物語文などを構成させる時に作成させるということが考えられるであろう。

過程構成の文法的比喩として着目すべきことに、同じ物質過程であってもある語彙を動詞として使用するか、あるいは *have* や *take* などの動詞と組み合わせ名詞として使用するかということである¹⁷⁾。たとえば *look* (「見る」) という表現も動詞として使用する *look at* の場合と名詞として使用する *have a look at* や *take a look at* がある。後者の名詞と使用する場合、*have* や *take* には動詞としての意味はほとんどなく、その意味は専ら名詞としての *look* に依存している。このような形は口語における行動過程の表現に一般的に見られるものである。

では、なぜこのような表現が併存しているのだろうか。実際に筆者も英作文の指導時や文法の授業でもこれらの表現の差異はどこにあるのかという質問を受けることがしばしばある。その場合に単純に一方を文語表現、他方を口語表現という説明では学生達を満足に納得させることはできない。実は名詞として使用する場合には英語の中にある豊富な形容詞を付加して動作や様子に対する表現力を拡充できるというのがその一番のメリットなのである (Halliday 1994: 147)。先の例であれば、*take a look at* に *quick* を加えて *take a quick look at* としたり、*careful* とつけて *take a careful look at* とすることもできる。あるいは付加された形容詞に副詞を加えて、*take a extremely careful look at* などと容易にその表現バリエーションを増やすことも可能である。一方 *look* を動詞として用いた時

には *carefully look at* は言えるが、**extremely carefully look at* と不自然になってしまい、同意のことを伝えられない。

上記の *look* の例のように同じ語彙でも動詞として用いるのか、あるいは他の動詞と併用して名詞として用いるのかという差異については、実際の教育現場では、多様な表現を生み出すための手段として存在するということを説明すべきであろう。たとえば、*take a careful quick look at* と *carefully and quickly look at* という例を比較し、このままであればどちらでも意味を伝えることができるが、この時は *careful* と *quick* という形容詞は *look* の修飾においては並列関係にある。このような並列関係で副詞化しても *and* で接続すれば良い。しかしながら、*take a extremely careful look at* のように形容詞にさらに副詞がつけられ修飾の従属関係が生じた場合には、単に副詞化して *and* でつなげることはできない。このような例を使用して、修飾状況において、このような表現の使い分けがあるのだと提示すれば良いのではないだろうか¹⁸⁾。

4. 展望と課題

名詞化と過程構成に関する比喩のまとめとして、もう一度 *In fact, the number of hours Americans put in is the highest in the world, and with U. S. firms offering the lowest number of paid vacation days in the Western World* という例を見てみよう。これは個別指導の際に実際に学生が解釈できなかったものであるが、理由の一つが *with U. S. firms offering the lowest number of paid vacation days in the Western World* に名詞化が含まれていることである。ここがもし *and U. S. firms offer the lowest number of paid vacation days in the Western World* のように節構造になっていれば、この手前の *In fact, the number of hours Americans put in is the highest in the world,* で区切りをおいて解釈できるであろう。しかし *with* という前置詞をとる名詞として *U. S. firms* が使用されその一種の埋め込み節として機能する *offering* が出てくることにより、この部位と先行する節との関連が把握できなかった。同じ名詞化と言ってもこの例の場合では *offering* という現在分詞が

動詞の痕跡を残している。したがって、名詞化の程度は低いにも関わらず、前置詞句の中に組み込まれることによって学生達の理解を阻む物となっているらしい。

またこの例では *In fact, the number of hours Americans put in is the highest in the world* に節構成の比喩が見られる。もしこの部分が *Americans put in the number of hours highest in the world* のように物質過程になっていれば埋め込み節を伴った関係過程よりもわかりやすいものになっているだろう。

このような例に直面する度に指導者としてはどのようなメカニズムが作用しているのか、圧縮と解凍という概念を元に、またそれが使用される目的と場面を列挙して学生達に説明することが文法的比喩の教育実践現場での第一歩となるのではないだろうか。

近年の会話中心の英語教育ではどうしても congruent な表現が優先され、文語に使われる incongruent な表現に接する機会が少なくなっている。しかし各種英語検定の取得や実践的な語学力の育成を求められている大学教育において、文語での情報取得・情報発信を可能にするカリキュラムの実践は不可欠である。従って、文法的比喩というメカニズムの解説を通して、多彩な英語表現を指導することが今後の大学英語教員に課せられた大きな課題の一つと言えるであろう。

参考文献

- Butt, D., F. Fahey, S. Feez, S. Spinks and C. Yallop. 2000. *Using Functional Grammar: An Explorer's Guide 2nd ed.* Sydney: National Centre for English Teaching and Research, Macquarie University.
- Eggs, S. 2004. *An Introduction to Systemic Functional Linguistics 2nd ed.* London: Continuum
- Halliday, M.A.K. 1989. *Spoken and Written Language.* London: Oxford University Press.
- Halliday, M.A.K. 1994. *An Introduction to Functional Grammar.* London: Arnold
- Halliday, M.A.K. and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English.* London: Longman
- Hayakawa, C. 2004. "Lexicogrammatical Resources in Spoken and Written Texts",

Sasaki, M. 1990. *On the ideational Differences among the Three English Translations of The Tale of Genji in Terms of the System of Transitivity in the Systemic-functional Grammar*. 国際基督教大学提出修士論文

Sasaki, M. 1995. 'An Analysis of the Clause Relations among the Three English Translations of *The Tale of Genji*', 愛知学院短期大学研究紀要第3号

注

- 1) 一例として筆者が2004年度に担当した学生7人中4年制大学への編入学試験合格した学生は3名,他に英検2級に合格した学生が2名いた。
- 2) 文法的には正しくてもコミュニケーション上適切でないものがその例と言える。学生に「名前を尋ねる表現は何か」と質問すると, *What's your name?* という表現が解答として出される。もちろん統語上は正しく, 名前を尋ねるという機能上も問題は無い。しかし実際の運用上の問題, すなわち語用論的レベルあるいは社会言語学的レベルにおいてはその使用に一定の枠や制限がかかる。見知らぬ人に名前を尋ねる場合は *May I have your name, please?* が一般に用いられるのであり, このような語用論的法則を知らずにしばしば海外での語学研修において失敗したなどの例を学生から聞くことが多い。
- 3) 英語検定準一級平成15年度第一回問題より抜粋
- 4) Halliday 1994: 344より引用
- 5) 選択体系機能言語学では順序を^ (caret) を用いて表現する。本論でもそれを踏襲して用いることとする。
- 6) Halliday 1994: 344より引用
- 7) Halliday 1994: xviii
- 8) モダリティーと叙法に関わる文法的比喩があり, 前者では主観性や客観性という命題との関わり方を示し, 後者では陳述, 質問, 提供, 命令という発話機能と関連する。
- 9) Butt et al. (2000: 73)より引用
- 10) Butt et al. (2000: 74)より引用
- 11) Butt et al. (2000: 74)より引用
- 12) Butt et al. (2000: 74)より引用
- 13) 書籍の場合にはタイトルによってその性質がわかるし, 雑誌の場合も署名などから, その性質がわかるので, 学生達もテキストの性質はある程度判断できる。しかしながら検定試験の問題などでは他に用いられる時制などを参考にして, 過去時制が主になる物語文であるのか現

在時制が主になる説明文であるのかを判断するように指導している。

- 14) 日本語の名詞化は他にも漢語への変換ということがあろう。例えば「作ること」を「生産」, 「構築」にすることなど。
- 15) 本論ではいわゆる学校文法における文法的誤りを含むものについては* (アステリスク) をつけることとする。
- 16) 同じような意味, 近い意味ではあっても, 決して同じ価値を持つイコールの意味ではないことに注意しなければならない。
- 17) 選択体系機能言語学における節構成の中での意味役割の違いがこれらを生むこととなる。すなわち, 同じ名詞でも物質過程における「対象」という役割か, あるいは「作用域」としての役割かという差異に基づく。
- 18) 表現の共存ということでは, 例えば, give や send のように二重目的語をとる動詞の用法も修飾ということにおいて説明できるのではないだろうか。例えば, give^人^物というのが一般的な語順であるが, これは送り先よりも送る物を重視して, 前置詞や関係代名詞説を後続させて, 物を修飾することができるからと考えられる。反対に送り先の人を修飾する場合には語順を give^物^to 人とすることによって, 人に対して同様に修飾表現を後続させることができる。単にこれらの表現があり, 間接目的語が後に来る時には to をとるという現象ばかりではなく, その動機付けを説明することによって学生達の理解度を促進させることができると考えられる。